



金融論B／II

第7回講義

貸出市場とメインバンク

担当教員：武田浩一

今回のテーマ



◆貸出市場とメインバンク (テキスト 第6章 p.147-175)

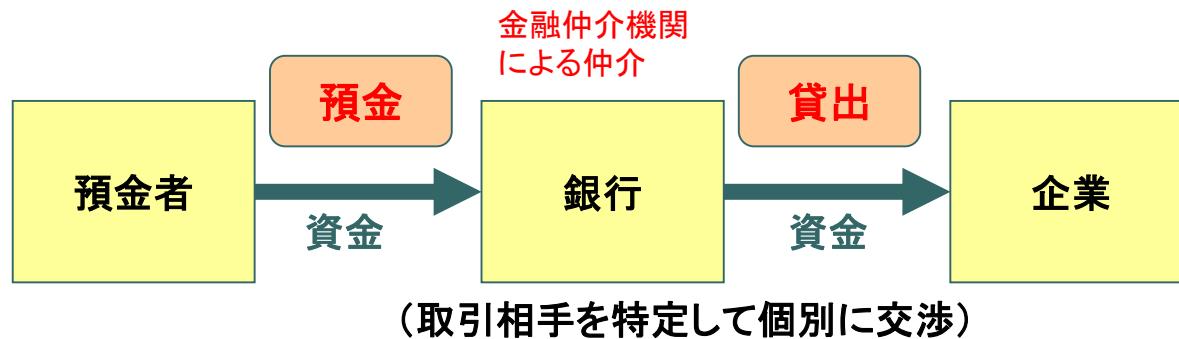
- 伝統的な銀行取引の特徴
- メインバンクとは
- 企業グループとメインバンク
- 海外の事例
- メインバンク関係の変化

相対取引としての貸出

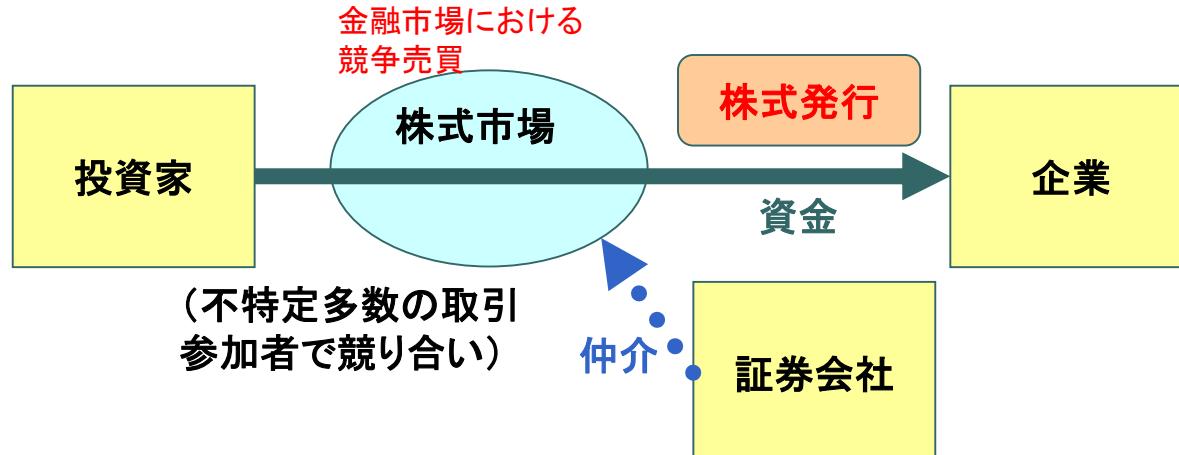
- 預金や貸出といった**伝統的な銀行取引**は、個々の取引主体が互いに相手が誰であるかを識別したうえで、相手方の信用度や特性を考慮して取引条件が決められる**相対取引**である。
- これは、取引の対象が規格化された金融商品であり、不特定多数の取引参加者による競り合いを通じて取引条件が決定される**金融市場**における**市場取引**とは取引のあり方が著しく異なる。
3

相対取引と市場取引

○ 相対取引としての預金と貸出

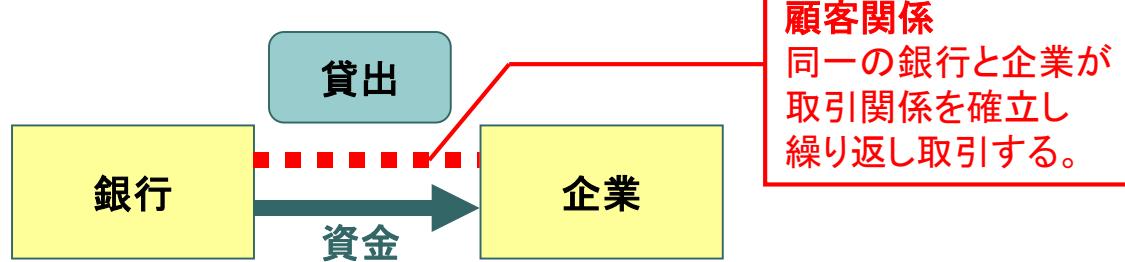


○ 市場取引としての企業の株式公募発行



顧客市場としての貸出市場

- 顧客市場としての貸出市場…預金や貸出といった伝統的な銀行取引においては、取引当事者間の関係が重視され、いったん取引関係が確立されると、その後も引き続き同一の銀行が取引先として選択される傾向が強い。このことから、貸出市場は**顧客市場**と呼ばれることが多い。



銀行貸出の特徴

- 借り手ごとに異なる貸出金利…各借り手に対する貸出金利は、銀行と借り手の間の交渉を通じて調整され、最優良企業向けの貸出金利である**プライムレート**に借り手の信用度に応じて**リスク・プレミアム**を上乗せして個別的・相対的に決定される。

$$\text{貸出金利} = \text{プライムレート} + \text{リスク・プレミアム}$$

銀行貸出の特徴

- 情報生産活動の必要性…借り手の将来所得という**情報が不完全**な資産を返済原資としていることから、銀行は借り手の返済能力を事前に審査(**スクリーニング**といふ)するだけでなく、融資実施後も借り手が約束を守っているかを事後的に監視(**モニタリング**といふ)するという**情報生産活動**に従事する必要がある。

銀行貸出の特徴

- 継続取引による費用節約…費用をかけて収集した借り手に関する情報は取引を停止すれば無駄になってしまうため、同一の借り手との取引を繰り返すことが費用の面から効率的となり、銀行と借り手の間に**継続的な取引関係**が形成されることが多い。

情報生産には
費用がかかる

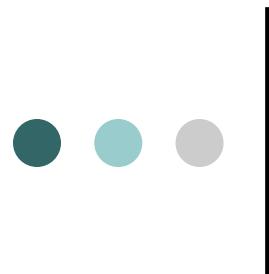


継続取引で
費用を節約



メインバンクとは

- 日本の銀行と企業の間には**メインバンク関係**と呼ばれる緊密で長期継続的な取引関係があるとされる。
- メインバンクに観察される事実として、次の5つが挙げられる。
 - ① 企業の数ある取引先銀行のうち、**最大の融資シェア**を有する。
 - ② 借り入れ企業の株式を保有する銀行の中で**最大の持ち株シェア**を有する。

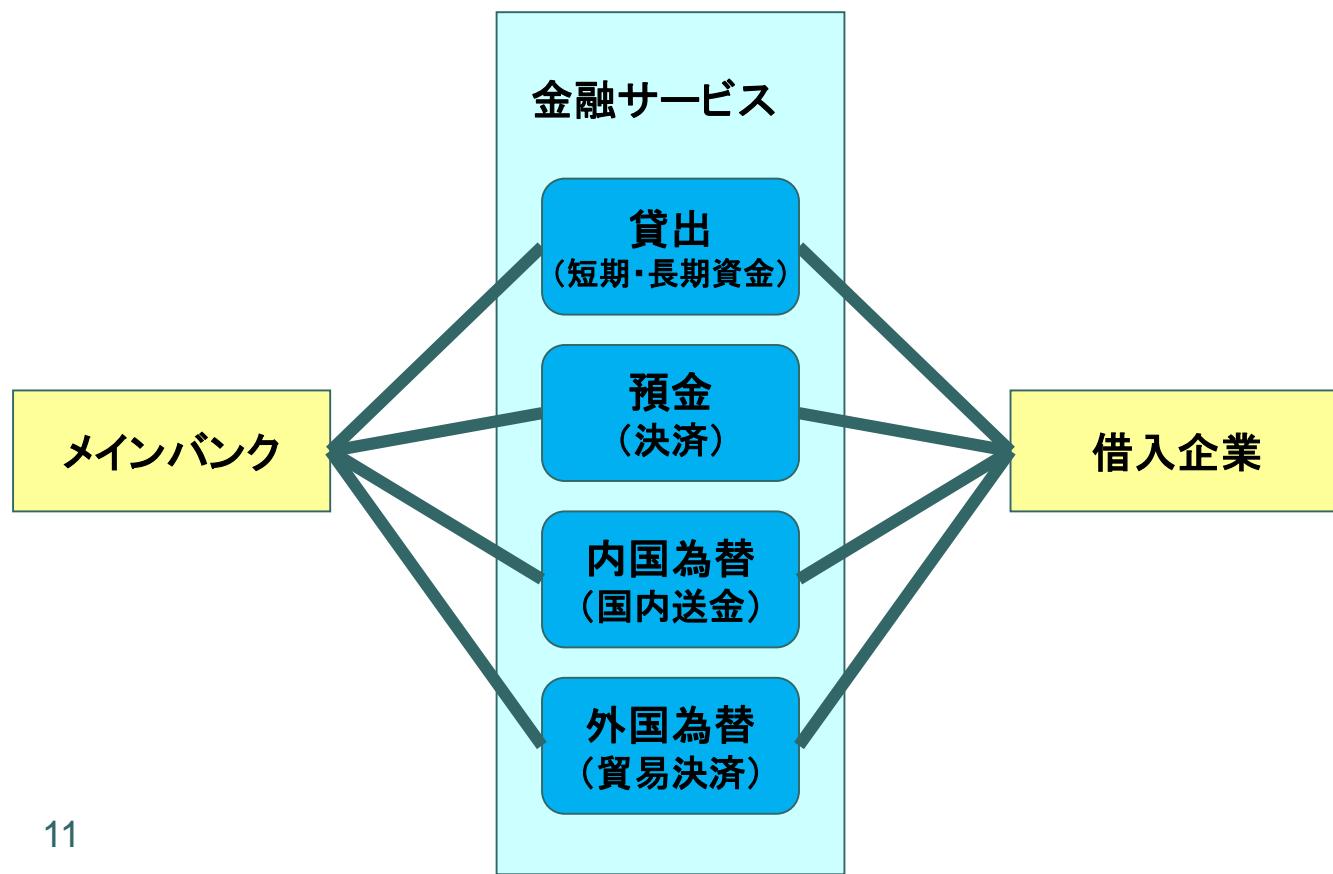


メインバンクとは

- ③ 借り入れ企業に対して役員を派遣している。
 - ④ 長期・固定的かつ総合的な金融取引関係を有する。
 - ⑤ 借り手企業が経営危機に陥ったときに救済策を講じたり再建に協力したりする。
-
- ただし、これらの特徴が全てのメインバンク関係に例外なく観察されるわけではない。

● ● ● メインバンクと企業の総合的金融取引

- メインバンクは企業にさまざまな金融サービスを総合的に提供している。

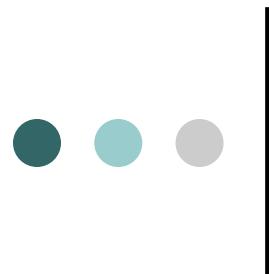


● ● ● | メインバンクによる企業救済

- 銀行主導で積極的に企業の事業再構築を実施するという例は多くない。
- 銀行以外に関係者の中に主導権を握れる主体が見当たらない場合に、やむをえず危機に陥った企業を資金面から支援するという受動的なパターンが多い。
- 救済しても十分な収益力のある事業として再生する見込みが少ない事業は救済せず、再生対象とする事業を選別する。

通常の銀行・企業関係との違い

- メインバンクは、次の諸点において、企業との間に通常の銀行取引を超えた関係を有することが知られている。
 - ① メインバンクは企業に対して
資金の安定供給を行う。
 - ② 借り手企業はメインバンクに**各種の銀行取引を集中**して利益・規模競争において他の銀行より有利な位置を与える。



通常の銀行・企業関係との違い

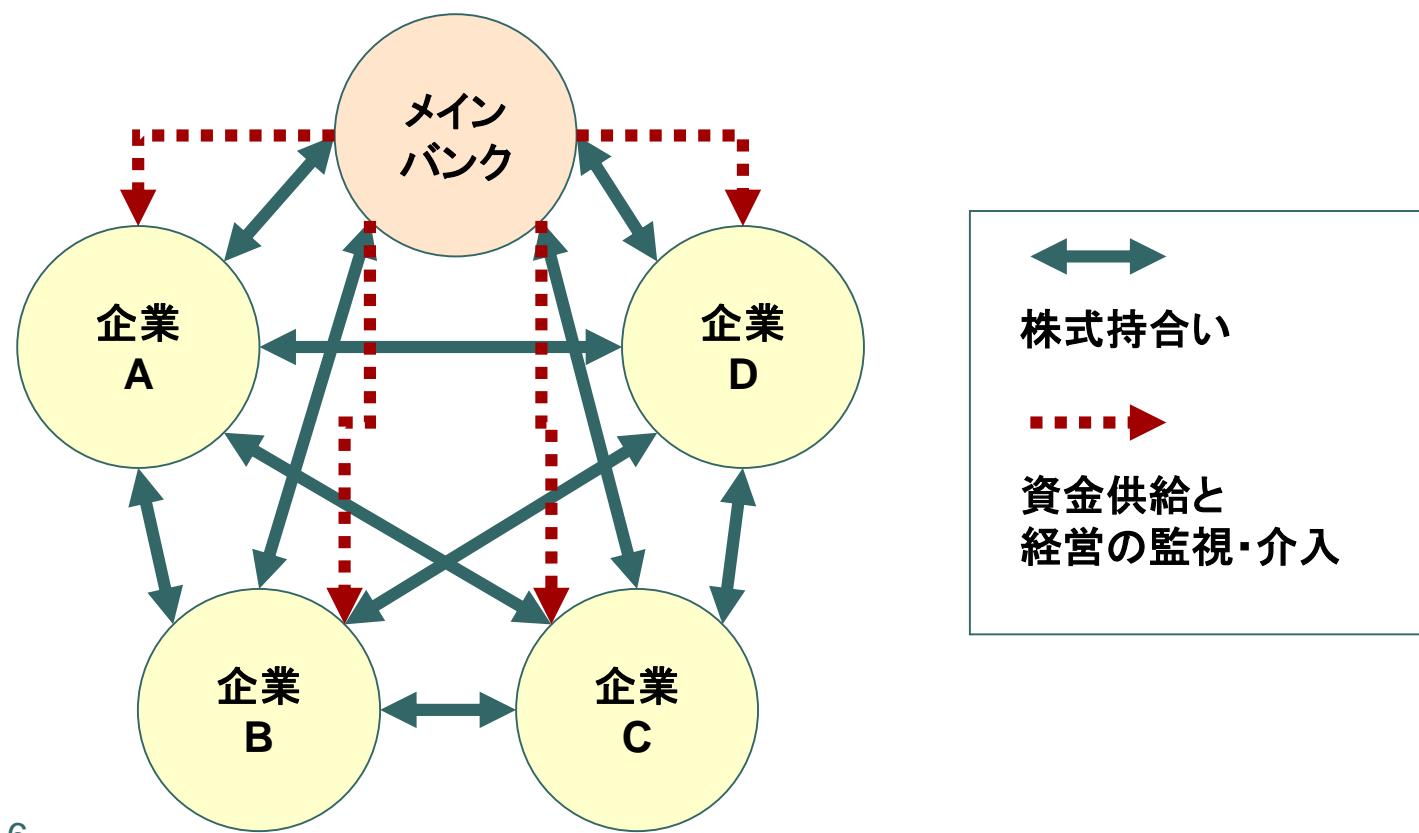
- ③ メインバンクは平時には大株主として借り手企業の経営権の安定化に寄与する。
- ④ メインバンクは企業の経営危機時には企業経営権に介入しうる権限を留保している。

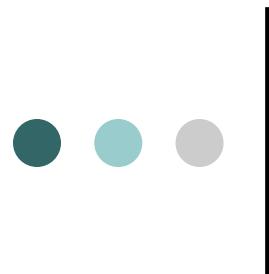
日本の企業グループとメインバンク

- 戦後日本の経済発展の過程で、企業グループを形成した日本企業は、企業同士が互いに株式を保有しあう**株式持合**によって乗っ取りなどの外部からの経営介入を防ぎ、安定した経営を維持してきた。
- 企業グループの中で、メインバンクはグループ企業への**資金供給**の役割とともに、**経営の監視・介入**の役割を担い、グループ企業の経営を規律付ける機能を果たしてきたと考えられている。

企業グループとメインバンク

- メインバンクによる資金供給と経営の監視・介入





メインバンク関係の本質

- メインバンク関係の本質的な役割は、
資金の安定供給および**借入企業の経営支配権安定化**に関する二重の長期契約として捉えられる。
- メインバンクが、**大口の貸し手**と**大株主**という二重の立場から企業の経営権に関与できることが、メインバンクの強固な監視・介入機能を支えている。

海外の事例



- 海外主要国においても、ドイツでハウスバンク、米国でラインバンクと呼ばれる特定の銀行が、特定企業と銀行取引上独占的な地位を確保し、当該企業を相手としてリレーションシップ・キャッシング(relationship banking)を開拓している。
- ハウスバンクやラインバンクが借り入れ企業の銀行取引において独占的な地位を持つことが多いのに対して、メインバンクは借り入れ企業の銀行取引を独占することは少なく、借り手企業は他の複数の銀行とも並行して取引していることが多い。

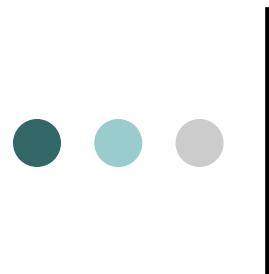
メインバンクと ラインバンクの違い



- 特に、米国では、大恐慌以降、銀行による株式取得が禁止され、銀行と企業が企業グループとして協調的行動をとることが制度的に認められておらず、ラインバンクは企業の株式を保有できるメインバンクやハウスバンクとは借り入れ企業との基本的な関係が異なる。
- 米国ではラインバンク主導の企業救済が行われない点でも、ラインバンクの経済における役割はメインバンクと異なる。

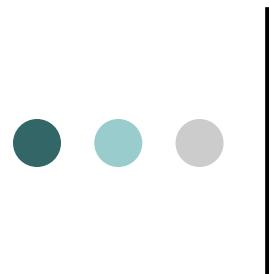
● ● ● | メインバンク関係の変化

- 1980年代以降、金融自由化の進展は、メインバンクと企業の関係に変化をもたらした。
- 特に、高度成長期にメインバンクの主要な貸出先であった日本の大手企業は、資金調達の場を銀行貸出市場から証券市場へシフトさせ、**大企業の銀行離れ**と呼ばれるメインバンク関係の縮小を進めた。
- 従来は大企業向け貸出の比率が高かった大手銀行は、近年は中小企業向け貸出の比率を高めている。



大企業の銀行離れの背景

- ① 金融規制緩和に伴い、大手企業が株式や債券などによる資本市場からの資金調達が容易になった。
- ② 銀行借入に伴うメインバンクによる経営の監視・介入が企業経営上の自由度を制約するマイナスの側面が意識され、大手企業が経営・財務上の自由度を確保しようという動きが生じた。

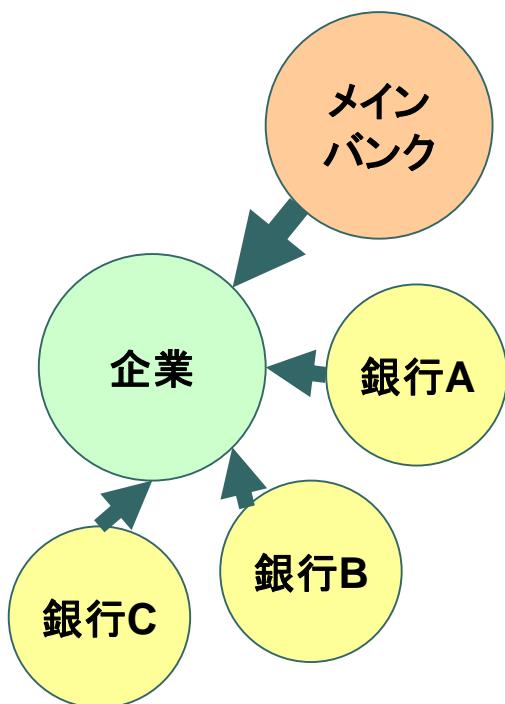


日本の企業・銀行関係の変化

- 日本の大手企業は、銀行取引の効率化を狙いとして、**取引銀行数の縮小**や**資金決済・内外為替の特定銀行への集中**を図っている。
- 一定の取引機会を与えられていた各大手企業のメインバンク以外の取引先銀行は、取引の減少への対応を迫られている。

日本の企業・銀行関係の変化

従来の企業・銀行関係



変化した企業・銀行関係

